

昭和二十年七月十二日、満州国楡樹屯にいた日本軍第八三四一部隊の陸軍家族全員に部隊長の訓示があったが、戦局は既に暗澹たる見通しの感じと受けとられて悲壮なものであった。

八月十五日後の混乱は言語に絶する有様、ソ連軍の爆撃から、暴力、略奪、悪らつたる暴虐無類の事件が惹起し、戦戦兢兢の様相、それに現住民の略奪、暴行に遭う日本人は避難民となる。栄養失調、伝染病にかり、五歳の長男はついに亡くなる。その翌日に妹も、続いてその妹も逝く。

原家は北満の楡樹屯部隊官舎で家族七人が平和な生活を営んでいたのに、昭和二十年八月十五日を境に、ソ連の不法な越境侵攻に遭い、避難が始まる連日連夜、雨の日も、闇夜にも長蛇の列で一步一步運ぶ幼子との苦難、ついに、ミサホ、綾子、良彦の三人の子供、それに第八郎さんと姪のみゆきさんと御主人の六人は他界されて、たった一人になって日本の土を踏んだ。ミネさんの心中は悲劇と感情が入り交り、いかばかりであったろう。有りのままの事実を記録として子孫に伝

え、金輪際、戦争は絶対にいけないと二十一世紀の若者に告げたいとの原ミネさんの警鐘である。

引き揚げ後は、若き日に資格をとった助産婦を、昭和二十七年開業し、平鹿町母子健康センターで新生児、妊産婦の保健衛生に関する囑託事務を執り、日本助産婦学術研究発表全国大会に五回にわたり発表するなど、長年の母子保健活動と公衆衛生の向上発展に寄与した功績により秋田県知事から表彰状を受章された功労者である。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

五十年の記憶

岩手県 藤井謙子

岩泉と言えば岩手県の奥地、その又奥の大川に生まれた私の家は貧しく、山の中腹に掘り起こした少しばかりの赤土畑の収穫で生計を立てていました。物心つ

いたころ家族は八人、畑の収穫だけでは暮らしが立たず、父は土木の請け負いなどしていましたが、いつも赤字らしく母が数少ない着物を質屋に持っていくのを見かけました。

冬の夜、隣家のおじいさんが毎晩のようにきて、いりり端で父と世間話や、世界の情勢など話題は生活のことなどに移り、父はこんな愚痴も言っていました。

「こんなせまい土地であくせく働いても家族を満足に食べさせていけない。ブラジルに行ったら思いっきり働ける」そんな話がでると、隣のおじいさんは慰めたり励ましたりした。けれど聞いている母や祖母は同意していないようでした。私もブラジルに行くのはいやでした。支那事変が始まって半年、大事な時に国を捨てていいものだろうか。尋常科を卒業して高等科に進級、新しい教室に入った。壁いっぱい貼りつけられたポスターや標語の中で私の眼を奪ったのは、満州開拓義勇隊募集のポスターでした。果てしなく広い平野は地平線まで続く。営舎にひるがえる日章旗、勇壮な植民の歌が聞こえるような、あこがれは夢よりはかな

い。満十七歳以上の男子と説明を読んでがっかりしたのですが、希望を捨てたわけではありませんでした。

小学校を卒業し集団就職する同級生もいたので、私も志願したのですが、母も姉も許さず、冬になって子守奉公に出ました。奉公先は岩手炭鉱の本社重役の家でした。ここで、貧乏人と金持ち、雇い主と使用人の差別のひどいのに驚きました。私の少女の日はもう終わりでした。夢だけ残して。

昭和十六年五月、珍しく母から奉公先に手紙が届き、父や兄は満州に開拓団員として四月末に出発し、九月には家族共々渡満するから八月になったら帰っておいで、と簡単な文面でしたが、私は天にも昇る心地でした。

開拓団の生活

新潟港を出航したのは昭和十六年九月下旬で、おだやかな海は私たちの門出を祝福するかのよう一路波風も立たず、四十時間以上の船旅は終わる。佳木斯には先遣隊の人たちが出迎えにきてくれて、一日中トラックにゆられ夕方団本部に着き、小森団長のあいさつ

を聞き、前から知り合いだった福田家に世話になり、私たちの住む西部落に移ったのは十月十日ごろでした。待つていた作業は先遣隊の作った稲の刈り入れです。

北満は十月になればもう冬です。湿原の水は凍り、田圃に行くには必ず通るこの道も、水溜りの氷をガリガリ踏みつぶし、地下足袋を脱いだ素足は真っ赤になり、氷の尖ったかけらにささって血がにじむ。身を刺すように冷たいけれど、今やらないと日増しに寒くなり氷は厚くなる。ともすれば滅入る心に言い聞かせる。夢にまで見たあこがれの大陸ではないか。粟土は自分の手で造るんだ。刈り入れが終われば脱穀が終われば本格的な冬となり、温度は氷点下二〇度から三〇度近くになる。

食べ物是一人一日一合の米と(約一五〇グラム)凍った野菜だけ。栄養失調で夜盲症になる人、得体の知れない急病で亡くなる人もありました。

昭和十六年十二月太平洋戦争が始まり、十八年の中ごろから戦況は悪化したらしく現役の若い人たちは国境へとたつて行った。一週間も遅れてくる新聞の報道

は、北のアツツ島、キスカ島は玉砕し、南の島々も米軍に占領されたとか。

北満の三月、まだ雪と氷に閉ざされているころ、第一回の召集礼状が我が家に届けられた。団の三人の青年、兄^{ツカヒコ}孟彦と高島由蔵さん、本部の工藤三郎さん、いつかはこういふときもあると心の備えはあつたはずなのに、現実となればやはりとまどいました。本部まで見送る四キロの道をただ寄りそつて歩くだけ、今は何も言えない。「兄さん、頼りない妹だけど一生懸命やるから、耳の遠い父さんも体の弱い母さんも、幼い弟妹も私が引き受けた。私の命がある限り」この時の無言の誓いが私の一生を定めようとは。

人手が足りないので苦力^{クワリ}を雇いました。父は満州の言葉は一言も話せない。私は青年学校でたった二時間基本の四声(発声)の使い方だけ習つて、会話はほんの片言しか話せない。一般の満人は文盲で筆談も通じない。父が苦力を連れて畑に行くとき私も日満会話の小冊子をポケットに忍ばせる始末でした。

終戦

明けて二十年、この年は雨量が多く畑は蒔き付けはしても除草ができず、作物より雑草の方が勢いよく伸びていました。団の人々は不安な日々を送っていました。どこそこの開拓団が襲われて全滅したとか、ソ連兵が国境線を越えたとか、うわさはうわさ呼んで、それを証明するかのように馬小屋に放火され馬が盗まれたり、牛が殺されたり、犬が何匹も毒殺されることもありました。八月十二日、騎馬の伝令が本部から飛んで来て、十五日までに依蘭に集合すること。早い話が立ち退き命令なのでしよう。依蘭まで馬車で駆け付けても二日はかかる。女、子供の足ではとても十五日には行き着けない、とは思いつながら行動に移らなければ時間は切迫していました。

母と二人で持ち物を整え、父は書類など処分していた。その日の夕方、隣村の満人村長が尋ねてきて、この忙しいのに何か話し込んでいます。話が通じないので筆談が交わされているようです。私も父に呼ばれて話を聞いたら、村長の話では、「今、長旅は暑いし危険だから、俺たちがかくまってやるから戦乱が収まって

から帰国したらどうか」こんな意味のことでした。父の心は決まっています。今更、満人を頼る気はない。結んだ口元が物語っていました。村長が帰り際に父は部落中の人に言いました。「秘密裡に伝えられた立ち退きの情報が満人にもれている。今夜のうちに本部に全員移りましょう」明朝、早くここを去ろうと思っていた人たちが、取る物も取りあえず慌ただしく本部に移りました。感傷にひたるひまもなく汗と涙の四年間の結晶は、今夜のうちに人手に無償で渡ってしまうのです。畑も家も、調教してやつと使えるようになった日本馬や、父がわざわざ日本に帰って持ってきた十三頭の緬羊も。

小学校の廊下で一夜を過ごす父たちは、岸にあふれる濁流の松木河を渡るため、イカダ造りに夜中までかかり、地元本部の人たちも旅立ちの準備にガタゴトと落ち着かない一夜でした。夜明け前から川渡しは始まり、私たちに順番が回ってきたのはお昼過ぎでした。老人や体の悪い人は一台の馬車に乗り、今夜の宿泊地大平鎮めざして。途中遅れた人を待つために瀟正屯しょうせいとん

で一休み、屯長が出てきてあいさつをしたあとで、皆大きな荷物を持って長旅は困難だからこの倉庫が空いているから、一時預けて落ち着いたら馬車で送り届ける。こんな話を聞いて我先にと荷物を倉庫に運び、屯長が大きな南京錠をかけ、これで安心と笑っていました。だまされたと分かったのはずっと後のことでした。

大平鎮に着いたのは日も暮れて大分時間がたってからでした。夕飯の準備はないと言われ持参の弁当で間に合わせました。泊まったのは牛馬宿の長いオンドル室でした。朝はとうもろこしのおかゆを食べ、七時ごろに宿を出て九時ごろ土龍山の麓にさしかかり、一人のお婆さんが子供を背負って、しょんぼり歩いているのに追い付きました。昨夜、山の向こうの飯塚開拓団が襲われ、この二人だけが生き残ったと、泣きながら話していました。私たちも一日遅れたらどんな目に遭ったか 싶れないと思うと背筋が寒くなる思いでした。

日暮れ近く協成屯に着く。ここは朝鮮村で水田専門にやっついて、依蘭岩手の水田指導員もこの村の人で

顔見知りもいたようですが、屋内には入れず小学校の校庭で蚊を追いながら寝苦しい夜を明かす。東の空が白みかけたころ、人々は荷物を整えて出発の指示を待っていたら、突然三、四人の長いスカートの満人の女性がお握りのいっぱい入ったカゴを持って来た。一人一個真つ白な大きなお握りでした。拝むように押しただいて、半分だけ食べて残りはお昼に。話は通じなくても心は通じるのでしょうか。感謝のまなざしを受けてにっこり笑って去っていく姿をいつまでも見送っていました。

また一日中歩いて、少し大きい村の城壁の根もとに休んでいたら追いついて来た一隊、若い女性ばかり皆銃をかついでいました。義勇隊開拓団の家族でしょうか。子供をオンブしている人も何人かいました。引率者はヒゲのあるおじさん。日本は無条件降伏との情報告知らされた。ああ、やっぱりとは思ってもシヨックは大きい。皆、道端に座り込んで歩く気力も失いました。その時、飛行機が二機頭の上をかかなりの低空で行ったりきたり、ソ連機のマークがはっきり見えました。

昨日までは日本の領空だったのに、我が物顔に飛び回るのを恨めしく見上げるばかりでした。その夜は村に入るのも恐ろしく、山の麦畑で飢えと恐怖の一夜を明かしました。

明日は依蘭に着く。依蘭に着いてどうなるか望みは今はない。依蘭の街が遠く見え始めたころ、道端に軍馬の死骸があつちにもこつちにもこわれた戦車や武器が散乱していて、ここで激しい戦いがあつたのでしょうか。祖母たちを乗せた馬車が追い越していった。馬車の中央に座ってほこりにまみれた祖母に手をふる。かすかに笑つてこたえていた。疲れた祖母の顔が今も忘れられない。つらい思い出の一つとして残っています。

依蘭の朝

依蘭の街は人一人見えない寂しい町になっていました。日本人の捨てた官舎に泊まることになり、私たち一家にも畳の一間が割り当てられ、何年ぶりかで畳の上で一家揃つての食事でしたけれど、これが最後となるのでした。

翌朝、まだ暗いうちに起こされ、飯盒を提げて庭に出て御飯を炊くが、飯盒が湯気を上げ始めたころ、もう出発の呼び声。ここでも食事はおあずけ。ここから先、馬車では行かれない。川を渡るので父は祖母を背負つて遅れる人をせき立て、私の姿が見えないのでいらいらしながら待つていてくれました。どこへ行くのかも知らず、ただ前の人を見失わないように後に続きました。街を出て畑の中を一散にかけ出し、その後から銃声が追いかけてきました。腰より深い作物の中でつまずいては転んで起きてまた駆け出す。だれかが叫んだ。「機関銃だぞ、気をつけろ」そう言われて見れば足元にブスリブスリと鉛のかたまりがつきささつていた。川べりでは早く早くと先着の人たちが呼びますが、もうだめだ一歩も歩けないそう思ったとき、祖母を河原に下ろした父が腰をかがめて駆けて来て、後ろにふさがり私と弟を銃弾からかばつて河原に駆け下りた。そして射撃は止んだが、皆安全地帯に到着したからでしょう。河原で木陰ひとつない砂地に座つて真夏の太陽にさらされ、皆無表情でいつくるともわからない

い渡し舟を待ちました。日が暮れるころ、やっときた二隻の渡し舟。私たち一家は二回に分かれて渡り始めたのは夜中に近いころでした。峠に着いたら先着のあの若い女性の一隊が、御飯のお握りを先着順に一個ずつ渡してくれました。協成屯以来のごちそうです。あの髪のおじさんが「二時間休息する。三時には出発するから遅れないように」と言つてどこかへ姿を消し、皆、思い思いの場所を取つて横になり星を仰いでいるうちにいつの間にか深い眠りに入り、アツと言う間の二時間でした。

何のために建てた小屋なのか、寝ていても星も雲も丸見えだけれど、疲れ切つた体に短い時間でやすらぎを与えてくれた。父は祖母を背負い、私は母と弟の手を引いて、また皆のあとに続き、泥道を歩き続けました。

祖母と別れて

その日の夕方、炭坑の街達連河に着き、どこの村も町も言い合させたように、町並みも家も荒れ放題一人人見えません。日本最盛のころは石炭の集積で有名な

所と聞いています。官舎の間を一時の休息に当てられ、祖母も父も一息つく間もなく、父はだれかに呼ばれて出て行きました。疲れた体を休めるひまもない父が気の毒でした。帰つてきた父の顔、今までに見たこともなかつた父の憂いに沈んだ顔、祖母の手を取り一言一言かんでふくめるような父の言葉は今も忘れられません。「これから険しい山道を夜も昼も歩くので、体の悪い人や老人を町はずれの尼寺にあずけることになつたけれど、おばあちゃんはどうします？一緒に行く気だつたらどこまでも負ぶつて行くけれど、おぶさる方も大変だと思つたが」祖母は「やれやれこれでやつと楽になれる。もちろん尼寺に行くから心配しないで先を急ぐんだよ」、父は「落ち着き先が決まつたら必ず迎えにくるから」、母は泣きながら着物といくらかのお金を小さな包みにして、父に持たせて涙ながらに送り出しました。祖母とはこれが最後の別れでした。送る側よりも送られる方が何倍もつらいことはわかっています。けれど世にこれほど悲しい別れがあるのでしょうか。祖母を預けて身は軽くなつても心はなお一

層重い。この時の心の傷は今でも私の胸の底に深く刻まれていきます。

ロープの川渡り

宵闇の達連河を出て徹夜で歩き通し、霧の深い朝になりました。ぬかるみの泥は靴にねばりつき一歩ごとにふり落とし、母は靴の重さに堪えかねて、はだしで歩いていました。弟は私の背中で目を覚まし、自分で歩くからとせがみますが、この道ではとても無理です。霧は徐々に上がり前方に小屋のようなものが見え、先の人たちが入って行くのも見えます。ここで一休みできるとは思えない。なぜかこのころは食べること、休むことに関心を持つようになりました。一人コップ一杯の高梁が配られる。思い出せば牡丹江を渡った峠でお握り一個、あれ以来何も口にしていない。おなかの虫も鳴く力もないらしく、高梁を飯盒に入れて水をさがしていたとき、遠くの木立から銃声が聞こえ、人々は方向も確かめず四方に散って行き、二人の妹もどこかへ言っしまいました、母と弟が私を待っていました。辺りにはもうだれもいません。二人の手を取って手近な

木立に急ぎ駆け込みました。ここにはだれもいないけれど心細くても二人はもう一歩も歩けない。小さな窪みに身を伏せて周囲をうかがっていました。銃声もいつか止み、水の音が聞こえるだけでした。姉や妹はどこへ逃げたのか、長い時間が過ぎたような気がします。母と弟はもたれ合って眠っています。

「おい出て来い」日本語だから安心して出て行く、小屋の前の異常などよめきに何が起こったか聞いてびっくり。子は親を探し、親が子を呼ぶ声に二人の妹がいらないのに気付いて、知り合いの人にたずねる。北側に川があつて水は岸にあふれている。逃げる場を失った人たちは夢中で川にかけ込み、止める人もないまま溺れて死んだ人がよほどあるらしい。妹をさがしに川の方に行ったら、びしょぬれの妹が泣きながら帰ってくるのに出会う。ああ二人共生きていたとホツとして叱る気にもなれず、話を聞けば、二人手をつないで川に入ったが、こわくなつて知らないおじさんに引き上げてもらつたとか。そのうちに、こんな所に長居は無用と出発する。つい一時間ばかり前に大勢の人が

のまれたその川を渡る。二人の男性が泳いで向こう岸に行き木にロープを結びつけ、試してみても大丈夫だとのこと皆で渡る。祖母を預けてから父は滅多に顔を見せない。こんな時、そばにいてくれたらと恨めしく思うこともありましたが、貴重な男手として後になり先になり仲間の世話をしているようでした。川下で「筏ができたからロープで渡れない人は筏に乗るように」と叫んでいました。母と弟を川下に行かせ、私は妹とロープにつかまり、濁流の勢いにともしれば押しながされそうになる妹をしつかり支えて、やっと向こう岸にたどり着き身支度もすまないうちにまたもや「盗賊だ」。妹は私の手を引いて早く逃げようと言う。筏の方も手間取っているらしくて母たちはまだ見えません。先にかけて出そうとする手をしつかり握って、今手をはなせばまた先刻のようなことになりかねません。それに夜の山中ではぐれたら探しようもないのです。襲われても死んでもいい。家族一緒だったら一瞬そんなことも考えました。

ようやく筏組と合流し、山の木立に入り「やれや

れ」後ろで早くとせき立てていた二連発銃を持ったおじさんがニヤニヤして、「あんなところにウロウロしているとはんとうに襲われるからな」と。

その夜、国道らしい広い道路に出た。雨の中を歩いて大羅勒密に近づいたとき、ソ連の戦車が後ろからきて減速した戦車の上から銃をかまえたり、引き金を引く仕草をしておどかして追い越して行きました。予定ではこの道を一晚中歩くことだったので、前方にソ連兵が待っているかもしれないので、また山に入り野宿することになりました。野宿の山で人員を調べたら、依蘭岩手の班は二十人もはぐれたことがわかり、父もその中の一人でした。さがしに戻ると言う人もありませんでしたが、班長が許しません。二晩、三晩と野宿を重ねて里に出て見れば、いつの間にか季節は秋になっていました。畑のあちこちに作物の盗難を防ぐ見張り小屋ができて、満人が二人、三人と見張りをしています。赤十字の旗の立つ大きな村に、武器を捨てた日本の軍人の宿営地に泊めてもらうことになりました。丸腰とは言え軍人と同じ屋根の下に暮らす心強さに甘え

て三日も泊まり、はぐれた人たちも追いついてきたのですが、父だけは帰ってこなかったのです。高島の母さんにたずねたら二日ばかり一緒だったが、本隊をさがして迎えにくるからと放れて行つたきりだつたと言います。今はただ無事を祈るほか術はありません。

軍人は何食わぬ顔で身の回りの整理をしたり護身棒を作つたり、もしかしたら前途は私たちよりきびしい茨の道が待っているのかもしれない。三日目の朝、この村を出発。ふり返つて手をふりながら別れ、安らぎを与えてくれたこの村を後にしました。

途中の小さな開拓団の村を右に見て歩く。人が去つて何日も経っていないのですが、荒れ放題で窓枠も戸口もなく壁の穴だけ残っていました。

昼ごろ方正の城外、合作社前の広場に着く。ここはソ連の統制下になっており、泊まる場所も彼らの指示を待ちます。先着の開拓民や、武装を解除された軍人でごつた返しています。ソ連兵は方正の街に引き揚げて行き、私たちはまた、ここで野宿しなければならぬいかと思つた。軍人は自分の宿舎から軍服や毛布を持

ち出して、皆に分けてくれました。お陰であの寒い冬も生き残ることができたと思います。日が暮れてきて空いている倉庫に入ることに、全員を収容したために横になることもできず、座るのがやつとでした。

夏の夜は短いと言いますが、あの夜だけは無性に長く思われました。朝、ソ連兵が町から出てくる前に倉庫から出なくてはなりません。無断で泊まったことを知られないために。

方正の町の方に土煙が上がり、騎馬のソ連兵が通訳を連れてやつてきました。一時間も待つてやつと通訳が出てきて「ここは軍人だけで満杯だから、東に三キロ行つた所に開拓村があるから、そこにしばらく住むように」とのことでした。開拓村に着いて住居の整理をしていたら、道路に出ていた子供がだれかこつちに這つてくるよと呼ぶ声に、私は道路にかけ出した。父が帰つてきたのです。駆けよつて手を取つても立つこともできず、隣家だった近藤さんに背負われて、仮住居の土間に横になつたが、口もきけない状態でした。父の話だと、突然のソ連軍の出現に、驚いて逃げる

人たちをまとめて本隊に合流しようと思い、頭数を調べたら山下さん一家がいらない。その人たちを捜しているうちに、自分も方向を失い山奥に迷い込み一週間もさまよった。口にする物は山ぶどうや茸など、沢の水を飲んでいました。夜、力が尽きて谷川べりに横になって、このままでは死んでしまう、動かなくてはと起き上がろうと川上を見たら、すぐ近くで熊が水を飲んでいる。父は驚いて腰をぬかした。熊は水を飲み終わりの、そのりのそりと近づいてくる、もう五歩も歩けばもうだめだと目をつむったら、熊は通り過ぎた。死んだ者には用がないと言うわけだったのでしようか。谷川に沿って下り、たどり着いたのは、私たちが世話になった軍人のいる村でした。開拓民の行方を聞いて食事を済ませ教えられた近道を急ぎ、見張り小屋に差しかかると中からでてきた鎌を持った満人に襲われ、持ち物衣類も奪われ、腰をけられて歩けなくなり、二キロぐらいの道程を四時間もかかってはって来たそうです。父は十日間ぐらい歩けませんでした。

三日後、避難民本部から指令が出ました。女性は老

若を問わず髪を切って坊主になること、女、子供は一歩歩きしないことでした。ソ連兵は毎日何回となく巡回してきて気に入った物は何でも持って行き、女たちは逃げまどった。坊主になったからとて油断はできませんでした。

方正收容所で

夜は毎晩ゲリラが銃を撃ったり放火したり、一緒に住み込んだ少年義勇隊の隊員が歩哨に立ち、そのうちの一人が射殺された。この村に住むのは危険になり、また方正に帰ることになりました。一カ月ほど前、座って夜を明かした倉庫に住むことになりました。前は入口の扉も窓もあつたのに、今は壁の穴になって、寒風は渦を巻いて吹き込みます。

団の小学校長の奥さんが臨月の体で二人の娘とわびしく暮らしていました。父と相談して何とかしてあげなくてはと、父は朝、戸板を二枚かついで行き、ソ連兵にとがめられ、話を通じないのでなぐられた。さわぎを聞いて通訳が出てきて訳を話してやっと許され、倉庫の片すみに戸板で囲った部屋で奥さんは涙を流し

て頭を下げていました。母と姉が手伝ってお産は無事にすんだけれど、日ごろの栄養失調で乳は一滴も出ない。赤子はだめでも二人の子のために母親だけでもと懸命の世話のかいあって、間もなく元氣になりましたが、一難去つてまた一難、父が倒れました。

高熱のためうわ言を言うようになり、私も病におかされその傍らに寝ていました。「俺はな、この大平野を畑にして仲間を呼んで、ホラ飛行機が仲間をいっぱい乗せて」父の夢は私の夢でもあったのです。見果てぬ夢を継ぐことは不可能です。父の最期の時も高熱のためよく覚えていません。夜も昼も眠っていたようにうでした。そして夢を見た。「母さん燃やすものまだある?」「もうなくなつたよ」「早くよくなって拾つてきっておくれ。オラの二本の足、役に立たなくなつたからぶつた切つて燃やそうか」こんな会話は夢の中でしたが、目が覚めたら下半身はまひして座ることはできても立つことが不能となり、腸の病のため便は一日何回となく母の手を煩わせました。私は考えました。腸に食物があるから便があり、何もなくなつたら治るかも、

母に協力を求めましたが反対され、自分で実行するより手はないと悟り、母は一日に何回も食物を運んでくは、涙と共に下げていく姿は氣の毒でした。一週間過ぎて便は少なくなり、それとともに体力も意識もかすみがかかってきた。「しつかりするんだ」生きるための非常手段とは言え自分をいためつけていると思ひ、母に聞いたら十二日目だと言つて、「いい加減にしな」と死んでしまふよ。お前にもしものことがあつたら残つた者はだれを頼ればいいのか……」あとの言葉は涙に消えていた。これ以上母を悲しませるに忍びなく、その日から重湯を飲みおかゆを食べ、生きるか死ぬか気だけは確かでした。必ず生きる。やらなければならぬことが山ほどある。母は着ていた唯一の綿入れのねんねこ（夜は布団代わり、昼は防寒服）をいつの間にか少しばかりの米と交換してきたらしい。私のためにはと思つと、親心に報いるためにも生きぬかなくてはならないと決心した。

決断の時

ソ連兵は本国に引き揚げたらしく、食料の供給も途

切れたけれど、母の献身的な看病のお陰で、十二月末ごろには物につかまって歩けるようになりました。気が付いたら周囲の人たちも残り少なくなっていました。亡くなった人、満人にもらわれて行った人、元気で歌を歌っていた小森茂^{シノベ}君もいなくなり、南の窓辺で予科連の歌を口ずさんでいた女の子も。前はこの歌を歌い私も男だったらとあこがれたこともありました。

年が明けて生活は行き詰まりに近かった。一日二度の食事は一握りの米と大豆、切干し大根、鉄カブトの鍋に八分目ぐらいを九人で食べる。それも何日も続かないと、思いあぐねていたある夜、一団の満人が襲ってきて、命の綱とも頼む毛布三枚（全部）奪われ、凍死を待つばかりとなり、満人に活路を求めるところを決意しました。甥と一緒になつてくれたら母子は引き取ってほしいと言う満人の老人に出会いすがりつく思いで話をききましたが、久人君の父さんは久人を頼みますと手を合わせて亡くなったので、捨てては行けない。内村さんの奥さんも老人に頼んで適当な人を見つけてもらい、二人の満人にそれぞれ託し、私たち母子六人

はあの老人について行きました。あのとときの取り引きは素性も住所も確かめることもできず、人の命はあの場合、犬や猫より劣るものだったでしょうか。

一カ月後、私は老人の甥と結婚し、夫は四十歳私は二十一歳でした。幸い母も弟、妹も健康を取り戻し、貧しくてもどうにか暮らしていけるようになり、何も考える余裕もない忙しい毎日でした。

昭和二十七年秋、つらい苦しい生活の中でたった一つの喜びは、生死もわからなかった兄、孟彦^{モリヒコ}が岩泉に帰っていることを知ったときでした。古い先短い母と人生これからの弟二人を帰国させようと思ったのですが、母の反対は押し切れず昭和三十六年六十六歳で母は異国に骨を埋めました。

一九六五年、文化革命の嵐は日本人であるがゆえに貧しい農家の主婦である私をも見逃しませんでした。スパイの嫌疑がかかっているとも知らず、毎晩、何かと名目をつけて呼び出され、自分の過去を告白することを促されたりした。他人を密告したり、身に覚えのないことを告白のしようもないではありませんか。そ

のときから以後、運動があることに引つ張り出されてはたまらない。長居は無用と思うようになりました。

あるときは、松花江が大洪水で家も畑も収入もすべてが失われました。畑に蝗しやんが発生し作物は全滅の年もあり、雹ひょうが降って伸び盛りの作物が粉々に打たれた年もありました。

昭和五十年、弟勝彦は妻子を連れて日本へ永久帰国しました。私は五十一年から帰国の申請をしていましたが、夫を残し子女同伴のためはかどらず、五十五年五月やつと日本へ帰国しました。兄夫婦の家に世話になり、兄嫁の肉親にもまさる心遣いに感謝しながら、子供たちのためにも甘えてはいけなと思い、元都南村（現在盛岡市合併）に県看護課の世話でアパートを借り、上の子忠和は当時二十歳で職業訓練校に無料で入学させてもらい、末の子忠平は中学校に入学し、私は昼はスーパの掃除をし、夜は食堂の皿洗い。忠和もバイトに行き、忠平は新聞配達など一日も早く自立することを願って働きました。県当局も村役場も親身に世話してくれました。仕事となればそうはいきませ

ん。新参は古参にこき使われ、叱言の言われっぱなし、何度かやめようと思ったこともありました。けれど、

ここで負けてはならないと歯を食いしばって辛抱したかいあって、どうにか乗り越えることができました。

そのころ、娘や二男も日本にきたいとしきりに手紙がきて、収入と生活が安定しないと身元保証人の資格はないので、皿洗いをやめて夜の掃除もするようになり、忠和の婚約者も呼びよせました。孫も生まれ、今は家族三十人に取り巻まれ、幸福者と人々に言われています。戦後五十年、何と長かったことでしょう。あの寒風吹きすさぶ方正の郊外に政府の無情を恨みつつ死んでいった父たち、子を残して死んでいく心残りに涙を流す母。音もなく灯の消えるように息絶えた子供たち。生き残った者に課せられた使命は、しかし、私に今何ができるでしょう。

人間は苦境を乗り越えることにたくましくなると聞いています。苦境を乗り越えることのできなかつた人の少年義勇隊、親の手をはなれて間もないあどけない顔、あの子たちは生き残って国に帰って祖国の復興

に役立つ人たちと頼もしく見守っていたのですが、後で話を聞いて暗然としました。

昭和二十一年春、収容所は無人となりました。国に引き揚げた人、満人に拾われて行った人、解氷前に収容所に放置された死体の運搬に、方正の市民が馬車を御して行ったとき、かすかに息をしている二人の義勇隊員を急いで病院に運びましたが、間もなく息絶えた。

六十人の義勇隊員の六十体目の死体だったので。こんな無残なことがまたとあるでしょうか。国では親も兄弟も消息も知らずに何年も待ったことでしょうか。あの人たちの分まで生きようと決心したものの、ただ生きていたからとて何もできない。空しく生きるより有力な人たちに代われるものならばと思つたこともありました。私にできることは生き残つた者のつとめとして周囲にあつたことを誇らず、いつわらず記して戦争の巻き添えとなった人たちの生と死と苦しみをこつこつと帰国したときから書き続けてきました。

五十何年前に卒業した小学校の課程を後戻りして、横文字やカタカナ言葉に悩まされ、今も辞典と首っ引

きです。私の戦後に終わりはないのです。今でも引き揚げてくる人たちのために、命がけで身につけた中国語で相談にのり、アドバイスもします。一日も早く父の国、母の国に定着できることを願いながら。

五十年前の無言の誓い。「私の命ある限り」と老の身を無駄なく過ごすことを生きがいと思っています。

【執筆者の横顔】

藤井謙子さんは岩手県玉山村の山また山の奥山の中腹を狭少の赤土を開墾し、田畑を耕作する小農業を営む五人兄弟の中で大正十四年一月二十日生まれた。

父親は土木の請け負いなどしていたが、経営不振から赤字を出しては母の着物を質屋にもつていく始末を子供の謙子さんは傷心していた。

その学校の掲示板に満州の大平原に開拓青少年義勇隊の募集広告をみて、謙子さんにも狭い日本より広漠満州の天地で働きたいものと思つた。小学校高等科を終えて他人の家に奉公に出た。貧富の差の大きいのに嘆いていた少女時代を過ごしていた。昭和十六年九月

渡満することになった。

満州の十月は寒風凜冽りんれつの状況であるが、先遣隊は立派に稲作田を耕作、ちようど収穫期であった。水田は凍りついているが、その中に裸足を真つ赤にしながらいり、秋の短い日中に急ぎ収穫・脱穀の作業にとりかかると。そして真つ白い御飯が食膳を賑わした楽しい日々があった。満州開拓農村社会は満州人も誰彼なしに貧富の格差なき平和そのものを肌感じて嬉しかった。

しかしながら、昭和十八年ごろから戦況悪化、開拓団から召集される男子が陸統としていく。

翌十九年三月には兄孟彦氏のほか二人に召集があり、兄を見送りながら、父も母も幼い弟妹をも謙子さんは面倒を引き受けた。私の命のかぎり、と、心に誓ったことが謙子さんの一生を定めたのである。

昭和二十年八月、日本敗戦、満州国瓦解、開拓団は右往左往の態、暴民から暴動、掠奪、死没、惨憺たる状況、正に地獄と化した中に避難するため父は祖母を背負い、謙子さんは母と弟の手を引き、山また山を歩き川を渡る。団本部から老人たちを町のはずれの尼寺

にあずけると決まった。お祖母さんは、これで楽になれる。尼寺に行くから心配しないでくれと言われた。お祖母さんとはこれが最期の別れになってしまった。父は高熱がひどく、ついに死亡。

ついに活路を求めた謙子さんは満州人の甥と結婚する。夫は四十歳、謙子さんは二十一歳、幸いにも母と弟妹も健康をとり戻した。もつとも喜び安心したことは、昭和二十七年秋、生死不明だった兄の孟彦氏が岩手県いわたの岩泉いわいづみに帰っていることを知り得た喜びである。残念なことに、お母さんは昭和三十六年に六十六歳

で異国の満州に骨をうずめた。

昭和五十五年五月、日本への永住帰国の申請が諾される。帰国後苦勞のかいあつて、現在は、家族皆で力を合わせて仲良く生活をし、また、いまだ中国より引き揚げて来られる同胞のため尽力されておられる。

母は強し、誠に尊く偉いもの。謙子さんの一層の幸せを祈る。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助